

四、まとめにかえて——日宗と前啓寺の現状から——

久 住 謙 是

(現代宗教研究所調査主任)

『日蓮宗寺院大観』(昭和五十六年刊)に、前啓寺は「現在廃寺同然となっている」とあるように、雑草に囲まれた中に、庫裡は倒壊し、本堂は朽ちかけて荒廃にまかされている。

日宗地区は、二軒の牧畜を営む家を残して他は去り、耕地は牧草地と植林地となった。一町歩で乳牛一頭を飼うしかないやせ地である。

植林地は、多くの労力を投入した耕地が、また、もとのえぞ松林などの原生林の景観に戻ろうとしている。後継者の無い牧畜業も、やがて草地在植林地に変わる可能性もある。

三百町歩の畑、日宗村、日蓮宗移民の理想は、ついに実現を見ずに終わった。兵どもの夢のあとではないが、現状の景色を見ながら、なぜか、という問いを、調査過程の中で考え続けてきた。このような経過をたどった反省と、伝道活動の今後のあり方に、現状が何を語り、何を教えようとしているかを問い返ししながら、作業を進めてきた。

具体的には、日宗村が、なぜ、廃村に至ったかという問題である。

すでに記述したことを、個条書に問題点を整理してみるならば、次のことが指摘できると思う。

一、入植地の選定の問題がある。当該地が、入植者が初めて体験した環境であり、先遣隊が事前に調査していなかったことが指摘される。

鉄道開通、交通の便が良いことのみで、急ぎよ、小利別が選ばれた経過に問題は無かったか。全道随一の極寒地、丘陵地、非肥沃地の地形的、土質的問題が、前もって検討されていなかったという基本的問題があったと考えられる。当時、先遣隊が入って、環境を調査した後、よびよせた団体もあった。しかし、一般には、北海道庁から与えられた土地に未踏査のまま入ったケースが多かったと思われるが、日宗村も、その轍を踏んだのではなかったろうか。

二、次に指導者を失ったことがあげられよう。日蓮宗移民を推進した日蓮宗宗務総監佐野前励は、移民を実施した五カ月後、明治四十五年九月七日、五十四歳で急逝された。朝鮮開教・東京感化院と日宗村は、佐野前励が、教勢の拡大と社会教化に卓越した指導力を発揮し、伝道史に残る功績は今日も高く評価されている。

佐野前励の遷化は、日宗村にとって決定的な悲劇であった。宗門にリーダーを失ったことは、その後の宗門と日宗村の関係が薄れ、宗門が進めた事業にも関わらず、宗策上、適切な指導処置が行われず、放置、放棄された。現在ほとんど、その存在すら知られずに今日に至った。せめて、日宗移民を見届けられる期間、宗門のリーダーが健在であったなら、日宗村の歴史は変えられていたと確信する。

三、最後に、佐野前励総監が進めた事業に対する宗門のその後の姿勢が問われるのである。佐野前励遷化後、法華村開教は、宗門評議員会の決議をへて宗門事業に移管された。宗門の責任において、その後も開拓指導、定着化が進められることになった。当然の措置である。

大正二年、入植した翌年の大凶作は、日宗村に飢えと寒さの危機をもたらした。日蓮宗は諭達を以て、宗門傘下寺院に実状を訴え支援をよびかけて窮状を脱することができた。

しかしその後、宗門事業としての支援や、定着、指導が行われた形跡はなく、記録や報告といったものも見当ら

ない。近代の宗門史にも法華村の存在について全くふれるところがない。忘れ去られた日蓮宗移民といってもよい。大正五年六月、当時、農事指導員の出張復命書が、法華村の状況を知りうる唯一の報告書である。その中で記すところの「根氣に初志を持続し改善に全力を注ぎ奮斗惜まず信仰の信念を發揮し」た法華村ではあったが、理想の法華村建設も及ばず、宗門から何ら援助することなく、入植者の中から脱落離村者が相次ぎ、刻苦精励して踏み止まった家族が、むしろ悲惨な生活を強いられる結果となった。

宗門が募集し、法華信仰による理想郷を実現して平和な同信同行の村づくりをめざした人々を、宗門は引率入植せしめた当初のみで、宗門事業と決議しつつ、事實は、放置され、歴史の過去に葬り去られてしまったという状況である。

宗門事業の宗教移民を通じて、教団のあり方、姿勢が問われているように思われてならない。

日宗法華村略年表

明治 35	陸別市街入植開始	明治 45・4・15	山梨団体、小利別の入植地に入る。
明治 39	陸別から北見に通ずる道路開削竣工。	大正元・9・7 <small>(明治45? 30大正と改元)</small>	宗務総監佐野前勵寂す(五十四歳)。
明治 40・8	山梨県に空前の大水害、死者二百三十二人、 損壊及び流失家屋約一万二千戸、水没家屋 約一万五千戸、流失田畑及び宅地約七百六 十ha他、山林・道路・橋・堤防等の被害多 数。	大正元・11	日蓮宗小利別説教所落成。身延山より下付 された御曼荼羅を安置する。主任は小松寛 静師。
明治 43・9・22	網走線、池田く陸別間開通。	大正2・4・22	福岡県より日蓮宗信徒、福岡団体二十八戸 入植。
明治 43	小利別入植開始。	大正2	北海道全般に冷害及び水害により大凶作。
明治 43	山梨県に再び大水害、前水害の復旧努力が 水泡に帰す。	大正3・1	北海道寺院、臨時救助義会を結成する(日 蓮宗年表)。
明治 44	網走線、北見まで開通。これにより小利別 等に入植者が急増。	大正3・1	日宗新報社、北海道法華村窮状、鹿児島桜 島爆発惨状救恤義捐金の募集を始める(日 蓮宗年表)。
明治 45・4・5	小利別小学校認可。	大正3	日宗神社建立(八幡社)。
明治 45・4・9	広瀬啓宣率いる山梨団体十五戸黒沢地区を 出発。	大正6	小松寛静師退任。
明治 45・4・14	山梨団体、小利別に到着。	大正7・2	中里観貞師就任。
		大正7・8	各尊像・什器等寄付により説教所として充 実する。

大正 8 日宗神社、小利別・日宗を望む高台に移転。

大正 10 小利別神社建立（大國主命を祀る）。

大正 11 台風により、全道にわたって大水害を蒙る。

昭和 2・6 中里師退任。

昭和 2・8 曾又英常師後任となる。

昭和 4・9・8 日蓮宗管長杉田日布、小利別説教所を御親

教。

昭和 6 日蓮宗陸別説教所、仮説教所を設けて活動

を始める。翌七年に二十坪の小堂を完成、

本格的に説教所として機能を始める。九年

三十坪を増築五十坪となる（現、妙法寺）。

曾又師退任。

昭和 6・11 檀徒代表、小樽市妙龍寺を訪ね住職広瀬啓

宣師所有の畑地三戸分を法華寺（前啓寺前

身の説教所の通称）の基本財産として寄付

を受ける（湊別村史）。

昭和 7・11 菅野栄淳師就任。

昭和 7・12 説教所の小利別市街地への移転を企て、広

瀬上人より三百円、一般檀徒より百円の寄

付により将来寺院とするべく浄地七町五畝

歩買求める等、基礎の充実を計りつつあつ

た（湊別村史）。

昭和 13・10 小利別市街地へ移転、本堂建立し開堂式を

あげる。

昭和 16・9 鈴木常順、寺号公称するため寺院建立の基

礎を固める。

昭和 20 檀家約四十軒。

昭和 24・7・21 寺号公称 前啓寺となる。

（常岡裕道研究員作成）